

多賀城の歴史探訪

現在では過去の権勢の名残はほとんど失われてしまいましたが、多賀城はかつて、東北地方の権力・行政・文化の主要拠点でした。城と名前がついているものの、多賀城は実際には城ではなく、東北地域の政務を司る中心的な役所でした。この地方の政権を担う場所であった多賀城は、重要な政治的・宗教的な行事や儀式の場でもありました。

もとの多賀城は奈良時代（710-794）の724年、周辺地域を見渡せる高さ30mの丘の上に築られました。城の建物は、各辺が約900mの敷地内に建てられ、周囲を高さ4.5mの土壁で守られていました。城は長年の間に3回再建・拡張されました。

300年間にわたって、法律や政策はこの場所で決定されていました。しかし、11世紀以後、多賀城は政権の交代によって廃城となり、土地の大部分は農業に転用されましたが、地元の農民は多賀城の石の土台に触れないように気をつけていました。多賀城跡は江戸時代（1603-1867）に再発見され、この地域を治めていた伊達氏の支援のもと、仙台藩の学者たちによって、数多くの硯などの史料が世に知られるようになりました。

2024年に完了予定の城門の復元工事が行われる丘のふもとには、小さな木の小屋に守られた「多賀城碑」があります。この高さ1.96mの大きな石碑は、762年に行われた多賀城の修繕工事を記念して建てられました。文学の世界では、この碑は「壺の碑」として知られており、俳人・松尾芭蕉（1644-1694）は、変化し続ける世界に対してこの碑が保っている永続性に深く感銘を受け、「奥の細道」の中でこの石について述べています。多賀城碑は重要文化財に指定されています。

多賀城跡から南西に1kmほど離れたところには、多賀城廃寺跡という寺の遺構があります。一説には「観音寺」と呼ばれていたというこの寺は、多賀城と同時期に建てられたと考えられています。寺の境内跡地は現在気持ちの良い公園になっており、ここでは寺のお堂とその側に建っていた大塔の基壇を見ることができます。多賀城廃寺跡は1966年に特別史跡に指定されました。